

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

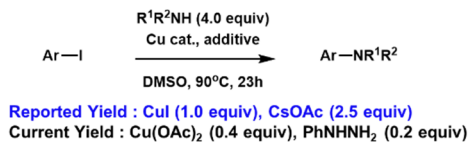
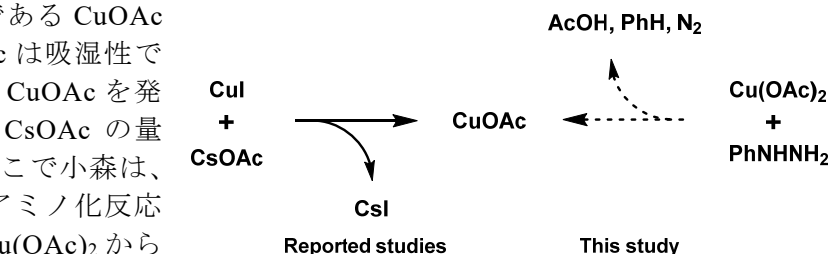
氏 名 小森 岳



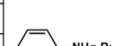
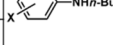





小森 岳は、「芳香族アミノ化反応と芳香族アルカロイドの合成研究」のタイトルで、研究を展開した。以下に、その詳細を述べる。

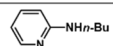
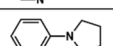
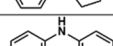
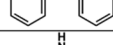
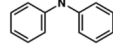
芳香環上に窒素原子を有する化合物は、多くの医薬・農薬や天然有機化合物が知られており、古くからその構築法の開発は盛んに研究されている。近年では、パラジウム触媒を用いる芳香族アミノ化反応が開発され、穏和な反応条件で進行するため高い官能基共存性が示されている。しかしながら、工業的な経済性の観点から、パラジウムは貴金属であることから、古典的なウルマン芳香族アミノ化反応に代表される銅を用いる芳香族アミノ化反応が見直され、Buchwald や Ma らにより、比較的穏和な条件で進行する触媒的芳香族アミノ化反応が多数報告されている。福山らのグループは、CuI/CsOAc を用いる芳香族アミノ化反応を報告しており、分子内反応を活用した天然物の全合成研究だけでなく、分子間でも反応が進行することも報告している。

岡野らの報告では、触媒活性種である CuOAc を系中で発生させているが、CuOAc は吸湿性であり、空気にも不安定であるため、CuOAc を発生させるために使用する CuI 及び CsOAc の量を削減することは容易ではない。そこで小森は、岡野の報告に着想を得て、芳香族アミノ化反応の活性種 CuOAc を、反応系中で Cu(OAc)<sub>2</sub> から PhNHNH<sub>2</sub> 還元して生成させることで、触媒量を低減し、穏和な条件で反応が進むのではないかと予想し、各種芳香族アミノ化反応を検討した。

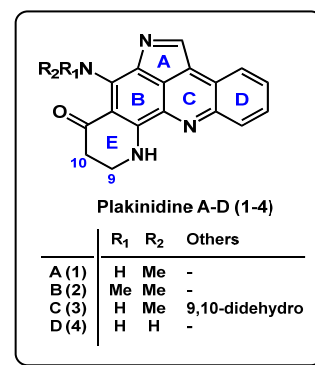
ヨードベンゼンと *n*-ブチルアミンとのアミノ化を検討したところ、Cu(OAc)<sub>2</sub> (0.4 当量)、PhNHNH<sub>2</sub> (0.2 当量)の条件が、最も良い成績を与えた。引き続いて、各種芳香族ヨード化合物とアミンとの反応を行ったところ、岡野らの条件とほぼ同じ結果となった。本反応系では、使用する Cu 触媒の量を低減させることができたが、一部のアミノ化反応において、収率の低下が見られた。この理由としては、小森は反応系の pH に影響を受けているのではないかと推測した。すなわち、岡野らの系は、CsOAc が 2.5 当量と過剰に存在する塩基性条件であるが、本反応系は、Cu(OAc)<sub>2</sub> の還元で副生する AcOH が存在する弱酸条件であり、塩基性条件では不安定な基質において、本反応系を用いることで穏和にアミノ化が行えるものと考えた。



Entry	Product	Current Yield (%)	Reported Yield (%)
1		20	78
2		66	95
3		94	99
4		30	21
5		93	99
6		74	86
7		52	50
8		64	76
9		17	37

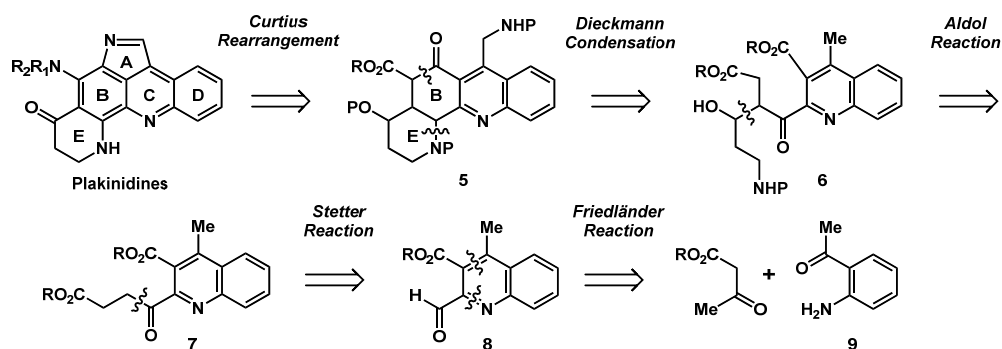
Entry	Product	Current Yield (%)	Reported Yield (%)
10		88	70
11		71	68
12		24	24
13		13	12
14		28	68

Plakinidine A,B,C は、海綿生物 *Plakortis sponge* から、Plakinidine D は *Didemnum* 属のホヤなどから、単離・構造決定がなされたピロロ[2,3,4-*k*]アクリジン骨格を有する芳香族アルカロイドである。プラキニジン類は、細胞毒性、逆転写酵素阻害作用、駆虫作用等の広範な生物活性を有することから、さらなる生物活性の発見・活性発現機構の解明が期待されている。また、プラキニジン類の構造上の主な特徴として、平面的なピロロアクリジン骨格、および4つのアミノ基を有する非常に電子豊富なB環を有することが挙げられる。特に、ピロロアクリジン骨格は、A環上の1,2位イミン結合がB,C,D環とHückel則を満たす共役系となっていないため、天然物として多く見出されているアクリジン骨格とは異なる特徴を有している。



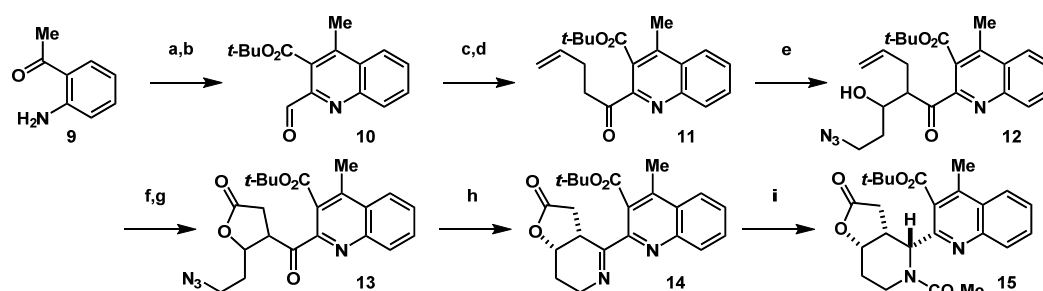
小森は、プラキニジン類の特徴である4つの窒素で置換されたB環上のアミノ基は、合成終盤にカルボン酸 **5** から Curtius 転位で導入するものとし、A-E環のうち、B環を開環してキノリン **6** へと逆合成した。次に、E環に相当する部分はアルデヒド **8** を足掛かりとして Stetter 反応で増炭して **7** とした後、アルドール反応で **6** へと導くこととした。アルデヒド **8** は、**9** から Friedländer キノリン合成の後、一方のメチル基を選択的に酸化することにより合成することを計画した。

Scheme 1



まず小森は、Nd 触媒を用いた Friedländer キノリン合成の後、位置選択的なセレン酸化により **10** を得た。**10** を用いた Stetter 反応が進行しなかったため、ZnCl<sub>2</sub> を添加した Grignard 反応で増炭した後、アルコールを IBX で酸化してケトン **11** とした。E環構築に必要なユニットを導入するために、N<sub>3</sub>CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>CHO とのアルドール反応で **12** を得た。続いて、オレフィンをオゾン酸化で開裂させた後、分子内付加したラクトールを TEMPO、ジアセトキシオードベンゼンで酸化して、ラクトン **13** を得た。アジドを Staudinger 反応でアザイリドとし、分子内にあるケトンと縮合することで **14** とした。イミンの還元では2種類の異性体が生成するが、次工程での Dieckmann 縮合が進行するのは **15** の異性体のみであった。そこで反応条件を検討し、ジクロロメタン中で E 環窒素をカーバメートで保護しつつ、NaBH<sub>3</sub>CN で還元することで、目的とする還元体 **15** を主生成物として得た。

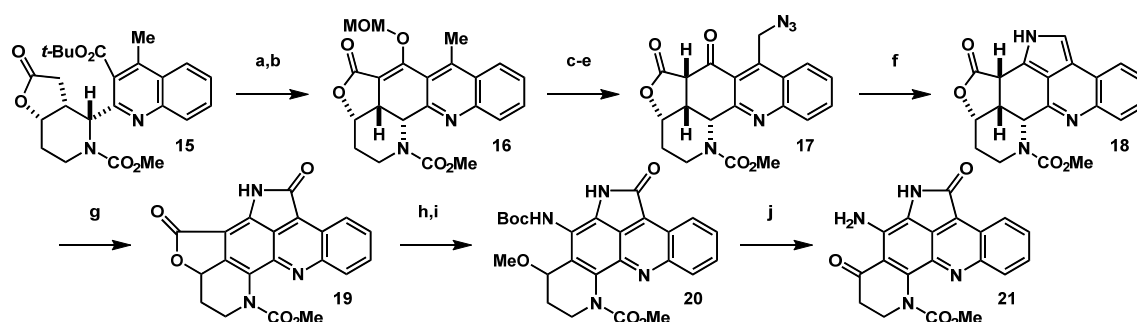
Scheme 2



Reagents and conditions: (a) AcCH<sub>2</sub>CO<sub>2</sub><sup>t</sup>Bu, Nd(NO<sub>3</sub>)<sub>3</sub> cat., *t*-BuOH, reflux, 76%; (b) SeO<sub>2</sub>, 1,4-dioxane, 80 °C, 85%; (c) CH<sub>2</sub>=CHCH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>MgBr, ZnCl<sub>2</sub>, THF, -78 °C, 93%; (d) IBX, DMSO-CH<sub>2</sub>Cl<sub>2</sub>, r.t. to 50 °C, 97%; (e) N<sub>3</sub>CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>CHO, LHMDs, THF, -78 °C, 81%; (f) O<sub>3</sub>, CH<sub>2</sub>Cl<sub>2</sub>-MeOH, -78 °C; Me<sub>2</sub>S, -78 °C to r.t., 81%; (g) TEMPO, DAIB, CH<sub>2</sub>Cl<sub>2</sub>, 0 °C to r.t., 88%; (h) Ph<sub>3</sub>P, THF, r.t., 50%; (i) ClCO<sub>2</sub>Me, NaBH<sub>3</sub>CN, CH<sub>2</sub>Cl<sub>2</sub>, 0 °C to r.t., 74%.

**15** を *t*-BuOK で処理したところ、Dieckmann 縮合が収率よく進行し、生成したケトエステルを MOM 化することで **16** を得た。A 環の構築は、キノリン環を酸化して *N*-oxide とした後、Polonovski 反応を用いてキノリン環上のメチル基に TsO を導入した後、アジド基へと変換して **17** とした。得られたアジド **17** を、Pd/C を用いた水素添加反応を行うことで、還元後に速やかにピロール環化反応が進行し **18** を得た。**18** のアクリジン骨格の脱水素反応を種々試みたが、いずれの条件でも反応は進行しなかった。しかしながら、3 当量の NBS を用いる条件で、ラクタム **19** が得られることを見出した。**19** のラク톤を加水分解すれば、Curtius 転位で 4 つ目の窒素原子を B 環に導入することができるが、通常の塩基条件で加水分解しても、抽出・精製の操作中に元のラクトンへと容易に戻ってしまうことが分かった。そこで小森は、酸性条件下で MeOH と作用させることで、ラクトン部位をメチルエーテルおよびメチルエステルとして変換し、ラクトンへの再環化を防いだ。その後、塩基性条件でメチルエステルを加水分解し、DPPA を用いて Curtius 転位させることで、4 つ目の窒素原子が B 環に導入された **20** を得た。予備的検討ではあるが、CSA 存在下 DMSO 溶媒中で加熱することで、**21** へと誘導できることが確認できている。これにより小森は、プラキニジンに特徴的な 4 つの窒素原子で置換された B 環を有する電子豊富なピロロアクリジン骨格の構築に成功した。

Scheme 3



Reagents and conditions: (a) *t*-BuOK, THF, 0 °C to r.t., 85%; (b) MOMCl, *i*-Pr<sub>2</sub>NEt, CH<sub>2</sub>Cl<sub>2</sub>, 0 °C, 95%; (c) *m*CPBA, NaHCO<sub>3</sub>, CH<sub>2</sub>Cl<sub>2</sub>, 0 °C to r.t., quant.; (d) Ts<sub>2</sub>O, NaHCO<sub>3</sub>, dioxane, r.t.; (e) NaN<sub>3</sub>, DMF, 0 °C; partition; 15%aq HCl, r.t., 55% (2 steps); (f) Pd/C, H<sub>2</sub>, THF-EtOH, r.t., 92%; (g) NBS, THF, 0 °C to r.t.; H<sub>2</sub>O, r.t., 57%; (h) CSA, MeOH, reflux, 80%; (i) 1M KOH, THF, 50 °C; aq HCl, r.t.; DPPA, Et<sub>3</sub>N, *t*-BuOH, 80 °C, 43% (2 steps); (j) CSA, DMSO, 120 °C.

以上のように、小森が開発した反応は、良好な汎用性と穏和な反応条件を併せ持つ。また、合成研究においては、創薬研究上重要な新規合成戦略を提示した。これらの成果は、薬学研究に寄与するところ大であり、博士(薬科学)の学位を授与するに値するものと認めた。